

## 創立 143 周年記念式典 式辞

143 回目の創立記念日を本日迎えることができました。学院の教育には創立から戦前の苦しい時代そして敗戦後の復興の時代から今日に至るまで、数多くの教職員の方々に学院の教育を通して、時代を背負い希望を持って人生を歩むための女子教育を推進していただきました。地方都市の長崎で、女子教育を一途に継続してきたことは神さまの導きと教育に携わる者への祝福の賜物であることを今一度、創立記念の礼拝で確認し、感謝したいと思います。また、ご逝去された同窓生の方々が、若き日に活水でみ言葉に触れ、教職員、友人たちと貴重な時間を共に過ごされたことを主に感謝したいと思います。

活水学院が創立以来変わらずに持っているものは女子教育だけではありません。寄附行為にある教育の目的と建学の精神としてあげられている言葉から明らかなことですが、教育の中で、礼拝と聖書の時間を他のキリスト教学校に比べても決して引けを取らない、いやおそらく最も重視してきた学校の一つであることです。

そのことは、硬直的な聖書の理解と世界観に陥ることなく、絶えず自らの過ちと欠点について反省し、互いの理解に向け希望を失わず努力し、教育を諦めなかったことにも表れています。教職員が一つとなり困難に立ち向かった精神は、聖霊の働きへの揺るぎない信頼と神さまからの導きが活水にあった事実を見落としてはならないでしょう。

福音への敵対的な態度は、民族の違いと宗教の違いからイエスに疑いをもちつつ接したサマリアの女が持っていたものでした。また同じことが 143 年前に米国から来た二人の女性宣教師が長崎で経験したことでもありました。それは今日の世界でも様々な形をとり広い意味での平和を脅かしています。ロシアによるウクライナ侵略、エネルギー危機から気象変動への取り組みにまで共通しているのは、差別と偏見、自己中心、自国中心主義の罪悪です。しかも国際レベルでは一定の役割をはたしてきた国際連合が機能不全におちいり、互いの非難応酬の場になっていることです。

もう一度、平和と活きた水について皆さんとこの機会に考えてみたいと思います。

先ほど読まれた聖書の箇所は、イエスがサマリアという異教徒の地に入ってきたことです。そこで水を汲みにきたサマリアの女に声をかけたのです。その女の境遇とその土地で生活をイエスは知っておられたからこそ、進んで声をこの女にかけました。聖書の他の記述でも、人にとってなくてはならないものは多くはないとイエスは言います。そして何度も地の塩、世の光、活ける水について人々に語ります。それらは単なる塩、光、そして水ではありません。人間社会はこれらを自分の力で勝ち取ろうとしますが、イエスはこれらが神から必要とされる人に惜しみなく出されると語ります。サマリアの女にも「婦人よ、わたしを信じなさい」（4：21）と分かち合う「活ける水」について話すのです。それは和解のための水だからです。

キリスト教は日本では少数派の宗教です。それゆえにたくさんの困難を活水学院も潜り

抜けてきました。特に第二次世界大戦直前の 1941 年春には活水に来ていたほとんどの女性宣教師は離日し、最後まで離日を拒んでいた一人の宣教師も 9 月にはやむなく日本を去りました。真珠湾攻撃の 3 か月ほど前です。本日歌う校歌の作曲者、オリーブ・カリー宣教師です。

その当時のことを撮影した NHK の「20 世紀の日本（長崎編）」DVD を先日観ることができました。その一部の映像には「ミッションスクールの女子学生が諏訪神社の参拝を終えて参道を降りてくる」というクレジットが入った映像がありました。生徒たちが全員が日章旗をもって階段を下っていく姿です。キリスト教であるがゆえに専門学校となり、生徒・学生数も減少し、授業料収入も激減しました。米国からの支援金送金も禁止された時代です。日本人教職員のみで活水を維持した時代でした。これらのことは、礼拝と聖書を手にして読むことを学校で行うために払った痛みを伴う大きな犠牲でしたが、その忍耐の歴史は今日の活水に、誇らしい希望を抱くことができる歴史でもあります。

現在でも力づくで領土を奪おうとしてる国、資本の力でエネルギーを独占する国、逆に資源を独占して経済安全保障を確保する国など、世界でいがみ合いと分断が起きています。私たち日本の社会でも広義の暴力が各方面で見えますし、海外では連日ミサイルが落ち、人々が泣き叫ぶ映像やニュースが、かれこれ半年以上テレビやインターネットで日常的に流されています。

数十人が死亡したというとき、そこには愛された父親や恋人が血を流し横たわっているのです。それはウクライナ人だけでなくロシア人兵士も同様です。かつての日本軍の兵士も同様でした。この長崎でも多くの生徒たちは竹やりの訓練を受け、原爆という未曾有の経験を長崎ではいたしました。

今、世界は待降節（アドベント）の期間に入りました。イエスの誕生を待ちわびる季節です。しかし私たちはこの幼子イエスがやがては十字架に掛かる事実も同時に覚えたいと思います。その十字架の上で息子が苦しむ姿を見上げる母親マリアがいたことを紛争と戦争のニュースに触れた時に覚える必要があるでしょう。

国同士の戦争に触れたとき、わたしたちはほんとうに無力感に襲われます。できれば考えることも避けたいと思います。ウクライナとロシアの正教会がどのように戦争と関わっているのかわかりません。世俗の力に頼らないで、教会の指導者がむしろイエスの声を聞くメッセージを発し、「水を飲ませてください」と相手に呼びかけた和解の言葉を思い出してほしいと願うばかりです。そして 144 年目に入るこの時に、活水の中で、教育を通して平和への願いと戦争を再び起こさない努力、何よりも命の尊さを、教育のなかで議論し、考え、行動できる教育をしたいと思います。それこそ活水らしい教育の原点でありましょう。

これからの新たな一年を聖霊の導きにより一人一人お互い愛し合える時が実現すると確信し過ぎていきたいと思います。

（祈り）

主なる神さま、あなたがこの長きにわたり活水学院を導き教職員、生徒、学生を励まし、

希望の光を灯し続けてくださったことを感謝します。これからも互いに愛し合うことを教育の原点とした中学・高校・大学での学びをお守りください。そして真の自由とそして責任があなたにより頼むことを通して与えられますように、聖霊の導きが一人ひとりの上に豊に在りますようにお祈りいたします。アーメン

学長 湯口隆司